

変わる環境に孤立も

屋根や軒先に雪が積もった住宅街。寒さのせいかわ外に人は見当たらず、辺りはしんとしている。表札がない所も多く、昨年と同じ時期よりも空き家が増えている印象を受ける。

「ここから出られるめどがようやく付いた。最初の予定よりだいぶ遅れてしまったけど」

岩手県大槌町の応急仮設住宅「小槌中村仮設団地」で暮らす赤崎幾哉さん(75)は言う。東日本大震災の津波で流された自宅の再建が今月にも



「仮設住宅に住む人は大きなストレスを抱えている」と話す赤崎さん。自宅を再建しても仲間の様子を見に来よつと思っている

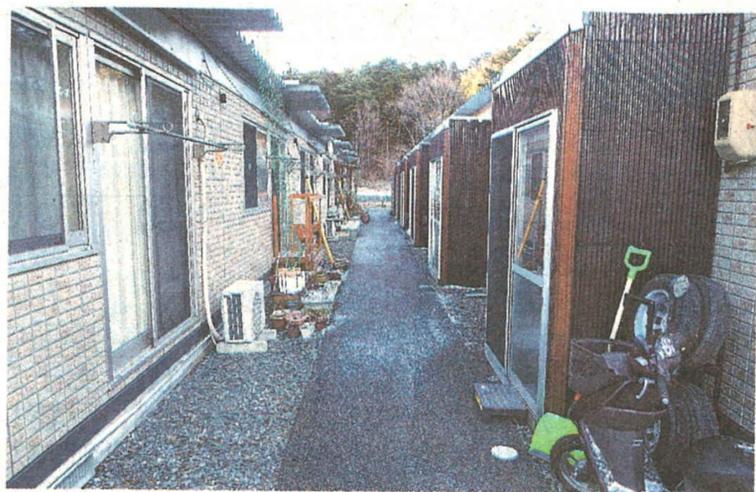
時の刻みは ~震災6年 岩手・大槌から~

② つながり

始まり、6月には完成する。当初は1年以上前に着工する予定だったが、津波被害を避けるための町のかさ上げ工事が遅れていた。

うれしさの反面、住宅ローンの問題には頭が痛い。以前住んでいた家の分を含めて1千万円の借金を抱える。鍼灸の仕事が続けて13年の分割で支払う計画だが、完済できる頃には90歳近くになる。それまで働ける保証はない。

もう一つ、気掛かりなことがある。ピーク時に100世



岩手県大槌町にある仮設住宅(上)と災害公営住宅(下)。それぞれのコミュニティの課題が生じている



岩手県大槌町にある仮設住宅(上)と災害公営住宅(下)。それぞれ

帯以上いた同団地の入居者が半減し、昨年4月には自治会を解散した。支援ボランティアが来ることも少なくなり「苦境を一緒に乗り越えた仲間が仮設に取り残され、寂しい思いをしないか」と心配する。

大槌町では、津波被害の跡地の土地区画整理など、町民の自宅再建に向けた事業の大部分が2017年度に終わる。災害公営住宅は整備予定の924戸のうち4割以上が完成した。

仮設住宅に親しい人がいなくなつて引きこもつた、自宅を再建した地域にうまくなじめない、災害公営住宅で一人人間関係をつくるのが面倒。活動を通じて菅谷さんはこんな声を聞く。

の異なるコミュニティの問題が生じている」

生活の立て直しは着実に進んでいるが「震災によってコミュニティが壊れるのは、もともとの住まいがあった地域、避難所、仮設住宅と3回目。町民の心理的な負担は大きい」と、現地の支援団体「Tsubomi(つぼみ)」メンバーの菅谷安美さん(26)。

国際医療ボランティアAMD A(岡山市)のサポート拠点「大槌健康サポートセンター」の元スタッフで、被災者らの交流イベントを開催している。

大槌町内で最も大きい災害公営住宅「県営屋敷前アパート」(151戸)を訪ねた。山あいのどかな風景とはアンバランスな5階建てマンションは昨年6月に自治会ができ、住民の田中栄さん(69)が会長を務める。

入居する約110世帯は、いずれも経済的な理由から自宅を再建できない人たちだ。高齢の独居または夫婦の世帯が全体の7割を占める。「震災の前は一軒家に暮らしていた人たち。マンション生活は不慣れで、互いに接し方が分からないようだ」と田中さんは話す。

面倒を嫌つてか、入居者の1割は自治会に入っていない。こうした状況では孤独死が懸念される。

「隣人との距離が近いマンションは本来見守りもしやすいはずだ」と田中さん。夏祭りやクリスマスなど年数回開く集会所のイベントに住民を誘い、つながりをつくりたいと考えている。(秋山昌三)

ズーム

仮設住宅

自宅をなくした被災者のため、災害救助法に基づき行政が提供する住宅。プレハブが基本。岩手県大槌町では48団地2100戸が整備された。入居期間は原則の年だが、大槌町は土地区画整理事業などの遅れで転居先が十分に確保できず延長されている。既存の民間賃貸住宅を自治体が借り上げる「みなし仮設」もある。